

時々、思うのです。 私にそのような人たちを、 愛することが できるようになるのか？と。

ルカ6章27-36

27. しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。

あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。

28. あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。

29. あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。

30. すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。

31. 自分にしてもらいたいと望むとあり、人にもそのようにしなさい。

32. 自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛していません。

33. 自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。

34. 返してもらおうつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。貸



した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸していません。同じことをしています。

35. ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。

36. あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。

序文：

今日の説教のタイトルは歌の歌詞からとりました。これは、他人に深く傷つけられ、痛みを負っ

たことのある人の心の葛藤から生まれた言葉です。このように心に深い傷を負った人は、苦々しい思いが心から離れません。この人は思うでしょう。どうしたら、自分の心をこんなに深く傷つけた他人を愛することができるようになるのか？と。時々、あなたがたも思いませんか？好きになれない人たちを本当に愛することができるようになるのか？と。それとも、愛そうと努力する気にさえならないのではないですか？

私たちは、敵を静かに見過ごし、日々の生活をなげなく続けてはいませんか？あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者

に善を行いなさい。あなたを迫害するもののために祈いなさい。これより難しいことがあるでしょうか？敵を愛するという事は、人間の心の傾向のすべてに反しています。善をもって、悪にこたえるというのは酷なことです。善に対して、善で応えるというのが普通です：それが通常の行為です。しかし、悪に善で応えるなんてとてもなく並はずれたことです。

このような普通ではない愛はどこからくるのでしょうか？相手の自分に対しての行動、言動に左右されることなく、その相手を愛し仕える、動悸、力、自由はどこからくるのでしょうか？

どうして、こんなことを考えなければならぬのでしょうか？

人が生きるということは、とても複雑なことです。敵を愛するなどということを考えなくても、それ自体が複雑なのです。自分の心には目を向けず、自分の努力でただ先に進むことは簡単です。しかし、植物と同じように、心の奥深くにある苦々しい思いの種から育つ実は、味が渋く、毒性をもっています。

隣人に対して恨みを持ち続け、その隣人を傷つけることがあります。しかし、それより深く、本人の魂を傷つけるのです。自分を傷つけた相手に対する憎しみ、

怒り、仕返しをしたいという感情にとどまり、その思いから開放されるのを拒否することもあるでしょう。しかし、そこには愚かさや危険が伴います。

二人の店主は仲の悪い商売敵でした。彼らの店は、一本の道をはさんで真向かいに位置しています。お互いに相手のビジネ



スをマークして毎日を過ごしていました。一人の客が自分の店に来ます：すると、道を挟んだライバルに向かって嫌味な笑顔を向けるのです。

ある夜、店主の一人が夢を見ました。夢の中で、ある人が現れこう言うのです。“私はあなたの願うものをなんでもあげましょう。しかし、あなたが受け取ったものの二倍のものをあなたのライバルは受け取ります。金持ちになりたいですか？あなたはとても金持ちになることができます。しかし、あなたのライバルはあなたより二倍も金持ちになるのです。それとも、健康で長生きがしたいですか？よろしい。あなたは健康に恵まれ、長生きするで

しょう。しかし、条件は同じです。あなたのライバルはあなたよりもっと健康に恵まれ、あなたの寿命の二倍生きるでしょう。さて、あなたは何を望みますか？忘れないでください。あなたが受け取るすべてのものの二倍のものをあなたのライバルは受け取るということを。”男は顔をしかめて、一瞬考えこみました。そして言いました。“私の片目をつぶしてください。”

彼は、ライバルの隣人が祝福を受けるよりは、自分の片目を失ったほうが良いと考えたのです。

憎しみと怒りを持ち続けければ、人生はシンプルにはならないの

です。ただ、私たちから、私たちが受けるべき祝福をも奪ってしまうのです。

それではどうしたらよいのでしょうか？

イエスは32節から34節の箇所でごこうっています。自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。返してもらつつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良い

ところがあるでしょう。貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。”

自分によくしてくれる人を愛し、そうではない人には、良くしないということは、驚くことではありません。いたって普通なこと、驚くような特別なことではありません。私たちには何の助けがなくてもできるのです。イエスは言っています。これくらいのことなら、神を知らない者、信じない者でもやっている。

キリストは敵を愛すようにと言います。この聖句の箇所では、愛は人の感情を意味しません。聖書的な愛は、私たちがどのような感情を相手にいただいても、キリストの御名において、相手の良い面を見るという態度なのです。ですから、人々に尊厳と思いやりをもって接します。時には、行動が先行し、それがきっかけになり、敵に対しての好意的な感情や気持ちが生まれたりするものです。しかし、時には、行動としての愛に、感情がともなわないことだってあります。

また、聖書的な愛は、決して現実を無視することではありません。悪い人たちを、本当は良い人たちだとすり替えたり、正義と戒めを捨てることはありません。

イエスの教える敵を愛するということは、その敵に向かって、彼らが悪い行いをしているという事実を、時には伝え、時には伝えないといった曖昧なものではあ

りませんでした。たとえ、相手を怒らせたり、怖がらせることになっても、真実をまっすぐに告げることなのです。

愛とは、私たちの言葉、行い、祈りを通して、相手のためになることを求めていくことなのです。たとえそれが私たちの敵であっても同じです。敵は、反抗的な子供かもしれません。冷たい、話を聞いてくれない、すぐにキレル夫 あるいは妻かもしれません。あなたがすることすべてにけちをつける、気難しい近所の人かもしれません。

イエスは、愛しなさい。あなたの敵を愛しなさい。彼らを愛しなさいとっています。どうか、愛することを止めないでください。他の人があなたの気に障ることをするから、あなたをばかにするから、あなたの心を傷つけるから、あなたを怒らせるから、がっかりさせるから、イライラさせるから、あなたを脅すから、そして、あなたを殺すからといても、愛するのを止めないでください。

あなたの敵を愛しなさい。ということ、何があっても、愛することを止めないことなのです。愛し続けることなのです。どうしたらこんなふうになんか人を愛することができるのでしょうか？こんなふうになんか愛することを可能にする力はどこからくるのでしょうか？

考えてみて下さい。こんな愛が、現実に現れたとしたなら、どんなにすばらしいことでしょうか？この愛以上に、キリストの真

実、力、事実を示せるものが他にあるのでしょうか？

(パイパーより引用)

それでは、イエスは何をされたのでしょうか？

たとえそれが不可能ではないとしても、深く傷つけられた人々を赦し愛することは、大変難しいということを私たちは分かっています。イエスの、敵を愛せよというこの教えは、私たちが自分の力ではどうもすることが出来ないということは明らかです。

イエスは、自分たちの力でこの教えを全うするようにと、私たちに空っぽの状態に置き去りにしたわけではありません。今日の聖句の箇所を、どのように敵を愛することができるのかを順番に書いたガイドブック的なアプローチで読もうとすれば、聖句のポイントを見失うことになってしまいます。何をすべきかが分かればいいというものではないのです。この箇所のメッセージは、もっと一生懸命に努力しようと言っているのではないのです。私たちの多くが何をすべきなのかは知っています。欠けているのは、それを可能にする意思と行動なのです。

“クリスチャンの生活はここから始まるのです。努力し達成することによっては始まりません。努力し達成することは出来ないということが分かったところから始まります。私たちは、貧しいもので、子供のように無力なので、よい医者が必要で、罪の病

を持った者なのです。それが分かって、私たちは福音を聞くのです。イエス、人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”(マルコ10:45);そして、代価なしに提供されたイエスを信じることにより、自分たちの罪は赦され、父なる神様の子どもとなり、聖霊が私たちの人生に来られ、イエスの教えに沿った生き方ができるようにと助けてくださるのです。”(パイパー)

神が私たちに要求されること何でも、私たちが自分自身の力で出来ると考えることは、イエス・キリストの十字架と恵みを無いものとしていることに等しいのです。(ジョン オーウェンから引用)

福音とは、私たちが、まだ敵であったときから、神が私たちを求愛し、愛して下さったという話なのです。神が存在するかしないかということに私たちが興味を示す前から、神様の方が私たちに気にとめ、見守って下さっていたのです。イエスは私たちを愛し、私たちのために死なれました。私たちがまだ、乏しく、弱く、彼の敵であったにもかかわらず、彼は御自身を私たちに下さいました。そして、私たちを彼の家族として下さったのです。

神様が私たちを受け入れて下さるのは、私たちのために成されたイエスの十字架の業によって保証されています。ですから、

私たちは、神様の御前に何が正しくて、何が正しくないのかを正直に認め、告白することが出来るのです。私たちは、いつもキリストを見上げ、そしてイエスの愛と私たちを受け入れてくださったことへの確信とにとどまり続ける必要があるのです。私たちが敵としている人たちを私た



ちは愛することができない！と、いうことを認めることにより、父なる神様の深い愛を受け取ることが出来るのです。そして、その受け取った愛を、私たちは、私たちの周りの人に渡すのです。私たちの愛は、私たちのキリストとの関係と彼の愛とによって成長します。救い主イエスの命、死、

復活に結びついている私たちの信仰が、愛するための力となるのです。敵を愛するということは、キリストとの結びつき、そして、キリストが私たちに下さったことからだけ生まれてくる反応なのです。神様から受け入れられ、神様から湧き出ている愛をしっかりと心に確信している

人が、愛をもって敵に向かうことができるのです。

そんな人たちに、どうしたら仕返しが出来るとかと思いつくのではなく、神様はどのようにして、わたしたちの敵を助けることができるのかを思うべきです。私たちが、神様

に祈りをもって、これらの思いを預けるべきです。イエスはたった一つのことが分かっています。イエスへの愛と神のご意志だけが、私たちの心の中にある苦々しい思いや憎しみに取って代わることが出来るのです。私たちが、苦い思いや憎しみを

持ったまま、その人の良いことのために祈ることは不可能です。

このように、人のために祈ることは、私たちの心の中のエゴや自分自身から、心を解放してくれます。祈りは人々の必要なものに視点を置きます。私たちがこのようにする祈りは神様の心を写し出しています。このようにして、祈りは私たちの心をも変えていくことが出来るのです。

おそらく、コリー テン ブームさんよりも、自分の敵を赦し、愛することの難しさと絶対的な必要性との両方が分かっている人はいないでしょう。

戦時中、ユダヤ人大虐殺の最中、ナチス収容所からユダヤ人を自分の家にかくまっていた女性がいました。彼女は52歳で未婚者でした。姉のベッツイーと、年老いた父と三人で、暮らしていました。ナチス当局が、この家族がユダヤ人をかくまっているという事をつきとめてから、家族の三人は、収容所に連れて行かれました。彼女の名前はコリー テン ブームです。

収容所キャンプで、コリーは、自由、人としての尊厳、自分の姉、父をわずか二三ヶ月の間で亡くしました。神の御むねにより、コリーは書類上のミスによって収容所から釈放されました。ちょうどその一週間前、そのレーベンズブルック収容所でコリーと同じ年齢の女性が処刑されていたのです。

戦争後、彼女は世界中から、スピーチの依頼をうけました。そして、彼女は、決して疲れることなく、どんな機会にも、感謝の心を持って、世界中でキリストについて語りました。彼女はいつも、神の罪人に対する絶対的な哀れみに、驚嘆していました。

神からそのような哀れみを受けたすべての人は、他の人に、自分の受けた神の哀れみを示す以外他にないことを知っていました。そして、時にはそれがどんなに難しいことかも、自分の体験からよく分かっていました。そんな、彼女の著書、The Hiding Place・隠れ場(邦訳)で彼女は次のように語っています。

それは、ミュンヘンの教会での礼拝後のことでした。私は、レーベンズブルックの収容所で、ユダヤ人たちが殺される前のシャワールームで、扉の前に立っていた元ガードマンの男・S.Sを見ました。戦後、この男が実際に会った最初の看守でした。その男を見た途端、すべての過ぎ去った記憶がよみがえってきました。部屋中にあざけりの声、積み重なった衣服、ベッツイーの痛み一青ざめた顔。

この男は、教会の人がひいて、まばらになったとき、私のところに来ると、微笑みお辞儀をして、次のように言いました。「ミスブーム、今日あなたは、イエス様が、私の罪をすべて清めて下さったことをお話して下さいまし

た。そのことを考え、私はどんなに感謝していることか！」

彼は、握手を求めて、私の前に自分の手を差し出しました。そして、私はといたら、これまで、何度も人々の前で、赦すことの大切さを説教してきたにもかかわらず、自分の手を引っ込めたままでした。

怒りと、報復的な思いで心が煮えたぎり、彼らの罪を考えました。イエス・キリストはこの男のためにも死んで下さったんだ。これ以上私は何を求めるのか？ 主なるイエスよ、私は祈りました。どうか私を赦してください。どうか私が、この男を赦すことができるように私を助けてください。

なんとか笑顔をつくりました。手を差し出すのをためらいました。彼に答えることが出来なかったのです。何も感じませんでした。この男に対して、ほんのわずかな暖かみも哀れみも感じませんでした。もう一度、心の中で祈りました。イエスさま、この男を赦すことが出来ません。あなたの赦しを私に下さい。

そう祈り、彼の手を取りました。すると驚くべきことが起きたのです。この知らない男へと、肩から腕、手、指先を通して、私の身体から彼へと何かが伝わって来ました。一方、私の心臓からは愛が泉のように湧き出てきて、自分でも驚きでした。

この体験から、私は学びました。それは私たちが赦すとか、私た

ちが良い行いをするという世の中で言うようなものではなく、神が与えて下さったもの、それは、イエスの赦しであるという事を。イエスが敵を愛しなさいと私たちにおっしゃるときに、その教えとともに、彼ご自身の愛を私たちに与えて下さるのです。

**時々、思うのです。
そのような人たち
を、愛することがで
きるようになるの
か？ と。**

コリーは、その難しい質問と、心に感じ取った答えの両方を、身をもって体験しました。自分の限界と砕かれた心で、彼女は心をイエスへと導かれました。

神は恵み深く忠実に人々をご自分へと召されます。どうか、彼の誘いを受けてください。信仰をもって、イエスに来てください。イエスがあなたのためにされたことを信じてください。これらのことばは、神に属している人々す

べてに慰めと強さを与えて下さいます。複雑な人間関係においても、彼のように、恵み、愛、希望をもって他の人々に近づいて行くことの意味を学んでく

ださい。神様が望まれるのは私たちが、憎しみ、怒り、そして苦々しい思いから解放されることです。神は神の子供とされた人たちを、彼の愛を体験し生きることが出来るよう導くことが出来るのです。その愛は本当の愛、自由に与え自由に受け取ることの出来る、本当の祝福です。



祈りましょう。

信愛なる父なる神さま

おそらく、これ以上すばらしく、
難しい教えはないでしょう。

私たちは思います。いつになったら、そんな人たちを愛することができるようになるのか？と。

キリストにおいて、愛は足りないものではないことを。私たちの愛が足りないときも、あなたの愛はいつも足りていることを感謝します。

どうか、私たちを御自身へと導いてください。

あなたは私たちに哀れみと親切をもって接してくださいます。私たちが、他の人にもどのように扱われようとも、周りの人とどのように接したらいいのかを学べる者としてください。

こわれた、複雑な人間関係の中でも、癒しと愛を与えてくださることに感謝して。イエス様の御名によってお祈りします。